

徳島市富田中学校  
「学力向上実行プラン」

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

未来につながる今を大切に、  
私たちの幸せ(ウェルビーイング)の実現に向け、  
自ら考え選択し、行動できる生徒の育成

校長

滝川 尚

学力向上推進員

木津教諭  
上野教諭

【各校の取組状況の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1) 知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
<p>○ 学校評価アンケートの結果から、約9割の生徒が授業に対してわかりやすさを感じている。</p> <p>● 学力の二極化が生じており、すべての生徒が基礎的・基本的な知識・技能を習得しているとは言い難い。</p>	<p>基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得する。</p>	<p>・学習指導要領や徳島県教育委員会が公表している支援策を中心に、各教科で目指す子供の姿を正確に理解する。</p> <p>・授業の中に「すべての教科等にわたる国語力を生かした授業改善のポイント(国語力向上タスクフォースの提案から)」で示された視点や授業のユニバーサルデザインを取り入れ、障壁を除く工夫をする。</p>	<p>・「徳島版読解力」を育成するための学習活動モデルを参考に、5つの力を育成するための取り組みを、個別学習及び協働学習の中に意識的に取り入れる。</p>	<p>・職員研修を通して、各教科で目指す生徒の姿や授業改善の方向性を共有した。</p> <p>・定期テスト等の基礎的な設問では正答できる一方で、初見の設問や異なる角度からの問いに対して、正確に答えることができない生徒も多い。</p>	<p>・知識のインプットで終わらず、習得した知識を他者に説明したり、小テストを実施したりして、アウトプット型の知識技能の確認を増やす。また、なぜその知識を使うのかという本質的な問いを授業内に位置づける。</p>

(2) 思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
<p>○ 対話や自己表現を必要とする活動に対して積極的に取り組んだり、活動を通して新たな見方・考え方を働かせたりすることができる。</p> <p>● 課題を自ら見いだす力、思考力・判断力・表現力を関連づけて活用する力が十分とは言えない。</p>	<p>対話を通して仲間と協働し、共に課題の発見・解決を図る。</p>	<p>・すべての教育活動でファシリテーションの浸透を図るとともに、生徒自らが問いを立て、仲間との協働的な学びにつなげられるよう発問を工夫する。</p> <p>・教育DX推進事業と関連させ、各学期に1回相互授業参観を行い、ICTを活用した授業実践を公開する。また、昨年度に引き続き、「富田中ICT活用モデル」を作成する。</p>	<p>・「徳島版読解力」を育成するための学習活動モデルを参考に、5つの力を育成するための取り組みを、個別学習及び協働学習の中に意識的に取り入れる。</p>	<p>・アンケートの結果から、95%の生徒が、タブレットを活用して、仲間と学びを深めたり広めたりすることができたと感じていることが分かった。</p> <p>・すべての教職員で「富田中ICT活用モデル」を作成し、最終的に28モデルが集まった。</p>	<p>・来年度も全学年、あらゆる教育活動でファシリテーションの浸透を図り、対話や自己表現活動に取り組める機会を多く設定する。また、対話の場面で、何を意識して対話すべきか(根拠を示しながら話す、他者の意見とのつながりを考えるなど)を提示することで、内容の充実を図る。</p>

(3) 主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
<p>○ 学校評価アンケートの結果から、約9割の生徒が主体的に授業に取り組んでいる。</p> <p>● 興味関心が低い分野の学習には消極的であったり、点数や評価が目的になっていたりする。</p>	<p>自分なりに学ぶ意義を見いだしながら、自ら考え選択し、責任をもって行動する。</p>	<p>・すべての教科で学習目標の達成に向けて、学習の見通しと目的意識を生徒と共有する。</p> <p>・伴走者として生徒と関わり、問いかけや励まして生徒の自走を促す。また、生徒の達成状況を見える化してフィードバックする。</p>	<p>・授業の「めあて」を提示するのではなく、「問い」を投げかけたり、生徒から引き出した疑問を「問い」として提示したりする。</p>	<p>・アンケートの結果から、約8割の生徒が、授業の中で自ら問いを立てたり、自分自身の目標を設定したりする活動に取り組んだと回答した。一方で、自分が学習する目的や理由について、「特にない」「点数や評価のため」と答える生徒が半数を超えていた。</p>	<p>・中間期の見直しで行った「めあて」を「問い」に変える取り組みを引き続き行う。さらに、生徒の実生活や興味に結びつけた「問い」を設定し、生徒が自ら答えを探究していこうとする態度を育成する。</p>